

capacious

障がいのある方のアート作品の
二次利用展開のケーススタディの報告書

目的

企業や大学と連携して、現代的な感覚と新しい発想で、障がいのある方のアート作品(原画)の二次利用の展開で商品化を目指すケーススタディを行い、この分野への興味・関心を高め、今後の可能性を広げる。

背景

障がいのある方の作品を、社会へ紹介しその理解を広めるためには、障がいのある方や福祉施設と、美術関係者や民間企業等を橋渡しする中間支援者が必要です。しかしながら、そのようなコーディネーションやプロデュース、営業など多方面への働きかけができる人材は、現在においてまだまだ不足しています。

一方、民間企業の中には、SDGsの活動指針等による社会的責任だけに留まらず、障がいのある方の作品の、個性あふれる魅力が商品の差別化や付加価値につながるという視点で、障がいのある方とのコラボレーションに取り組む企業も増えてきています。

ケーススタディの概要

実施期間

2023年9月21日～2024年1月18日

実施方法

今回、障がい者就労支援を通じた紙包装の価値向上事業「Para Package®」を取り組む山口包装工業株式会社と、そのクライアントである米粉の菓子製造を行う有限会社南出製粉所に協力頂き、近畿大学文芸学部文化デザイン学科と共に、Para Package®を使った新しい米粉クッキーのパッケージデザインの試作を行いました。

半年間の授業プログラムの過程で、学生にアート活動を行う福祉事業所を見学体験をしてもらうことや、協働する企業訪問を行い、商品の特性や大切にしている経営方針を学びながら、障がいのある方の能力(クリエイティブな能力)を活かした、新しい商品のパッケージデザイン及びプロモーションの提案を目指しました。

企業の方々に関わって頂くことで、実社会の経済活動の上でも通用させる為の指摘等を頂きながら、障がいのある方のアート作品の二次利用展開の課題と可能性について深く学び考える機会となりました。

連携

近畿大学文芸学部文化デザイン学科 森口ゆたかゼミ 3回生 10名

山口包装工業株式会社 (大阪府八尾市)

有限会社南出製粉所 (大阪府泉大津市)

福祉事業所工房はんど (大阪府富田林市)

*Para Package® について

「障がい者の才能で、パッケージを変える」をテーマに掲げた、山口包装工業株式会社が取り組む社会課題解決型事業。工房はんどは、本事業の代表的な協力団体・福祉作業所の1つ。Web:para-package.com

スケジュール

2023年9月21日	プロジェクトについてオリエンテーション ・Para Package® について ・capacious について
9月28日	南出製粉所 企業訪問・商品研究
10月5日	工房はんど 福祉事業所訪問・見学
10月12日	デザイン・プロデュースの開始
11月9日	中間発表 商品のコンセプト、方向性の提案 デザイン・プロデュースの発展
2024年1月18日	最終発表 商品のパッケージデザインの 提案・プロモーションの提案



オリエンテーション



南出製粉所



工房はんど



中間発表

デザインプロセス

1

7日間クッキーというコンセプトに合わせる為、南出製粉所さんに7種類の味を指定してもらった

2

コンセプトを商品全体で伝えるために、月曜日から日曜日までの7つの箱が一行に並び形を重視した

3

同時に、クッキーの内容量と価格のバランス、並べた時の全体の大きさ等、総合的に検討してサイズを決定した

4

作品イメージは、Para Package®プロジェクトの協力団体である工房はんどの所属アーティストによる既成作品から選出した(原画の描き下ろしをするにはスケジュール的にタイトであった為)

5

商品のパッケージデザインは、原画(オリジナル)の色や大きさを尊重してデザイン展開をした

6

最終デザイン案は、7つのパッケージが並んだ際の配色バランスと、全体に統一感をもたせるためのカバー色の配色バランスも考慮した

7

プロモーション方法として、それぞれの曜日でクッキーを実際に食べているシーンの短い動画作成をする提案まで想定して行った



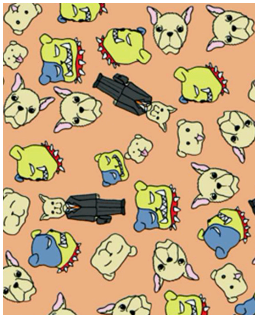
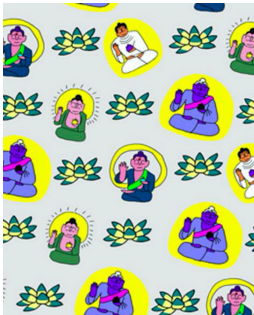
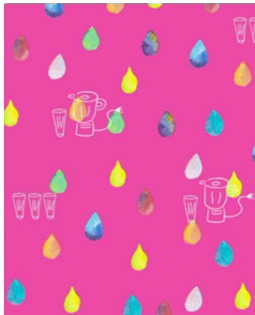
宣伝方法

○ 動画・画像投稿

→それぞれの曜日をイメージした短い動画・画像を作成(7種類)

月…朝寝坊したOL
火…子育ての合間にリラックスする母親
水…課題に追われる女子大生
木…夜にほっと一息
金…1週間のご褒美
土…早起きしてクッキーを食べる
日…家族、友人と大人数で

曜日×フレーバー×柄の組合わせの検討

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
クッキーの味・フレーバー*						
朝ごはんクッキー	くるみ	罪悪感のない お米クッキー	ココア	スノーボール	玄米クッキー	サブプレレン
味の理由						
1週間の始まりであるため、クッキーを通して頑張るきっかけをつくる	くるみの優しい甘さを通して一休みしてほしいため	疲れが出る週の真ん中に罪悪感なく多めにクッキーを食べられるように	甘いものを食べてもうひと頑張りしてほしいから	頑張った自分へのご褒美、1週間の疲れが口の中で溶けるように	身体の健康と心の充実につながる土曜日にして欲しいから	みんなでサブプレレンを食べて1週間を締めくくる
イメージ**						
						
「フレンチブルドッグ」 Riku	「リスとどんぐりと 秋の葉っぱ」 mizuki	「仏像」 yu-ma	「みっくすじゅーす」 あんず	「雨の中のまぶしさ」 さくらもち	「象形文字」 yuuri	「ピンクの大きな花」 yuuri
柄の理由						
ブルドッグのサラリーマンへの擬人化がユーモラスであるため	くるみとリスのイメージが相性が良いから	罪悪感を生まない仏像の微笑みがイメージに合っていたから	暖色を差し色として、落ちついた雰囲気を取りいれたいため	スノーボールの優しい味と金曜日の落ち着いた時間と相性が良いから	シンプルかつ大人っぽい柄が玄米のイメージに近いから	花柄の可愛さとポップな色合いが、みんなで食べるパーティーのような華やかさを思わせるから

*7つのフレーバーは、南出製粉所さんが指定 **イメージは、工房はんどの既存原画のアーカイブ集から学生が選択
 画像はすべて copyright©kobohand

最終発表 | 商品のパッケージデザインの提案・プロモーションの提案
2024年1月18日(木) 13:15~15:30

商品名

7日間ひとやすみクッキー -まいにち 米らいふ-

コンセプト

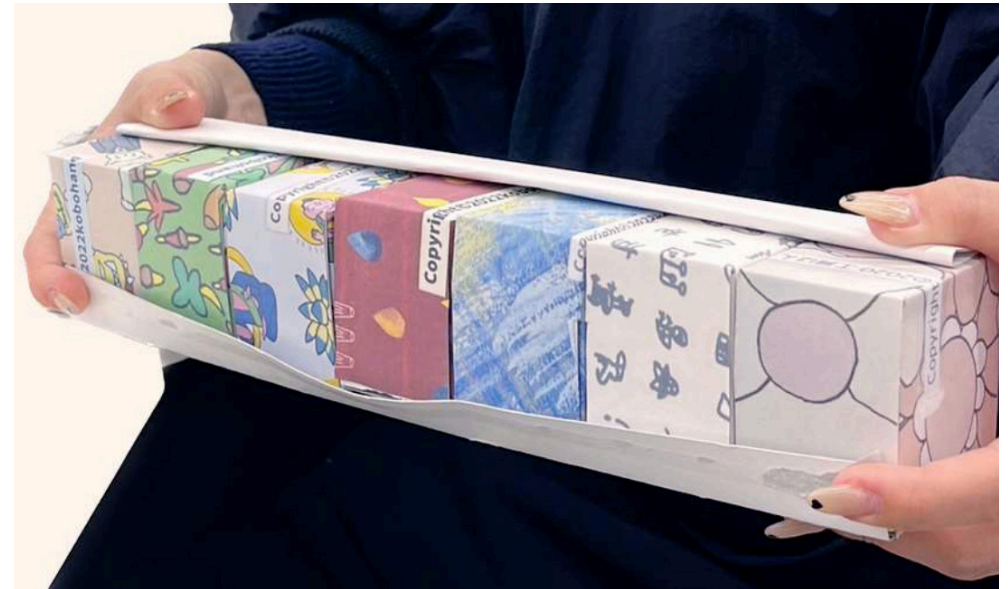
日常生活に溶け込める

まだ日常のすぐそばにあるとはいづらい「米粉と障がい者アート」

この2つが過度に主張しなくても自然と日常に溶け込めるように

商品説明

- ・1日1箱を目安とした7日間分のクッキーセット
- ・毎日仕事や家事、育児を頑張る大人の皆さんをターゲットに、
1日10分クッキーを食べながら「ひとやすみ」を提案する
- ・毎日違ったフレーバーを少しずつ楽しむことができる



パッケージのイメージ:

箱は横一列に並べ、透明スリーブで包む。中身が全面見えるのではなく、一部が見えるような想定。

講評

南出英司さん / 有限会社南出製粉所

- ・大変よいアイデアを沢山いただくことができ、今後の参考にしたいと思う。
- ・商品の正式名「まいにち米らいふ」か「7日間ひとやすみクッキー」どちらを押し出していくか？

山口敦央さん / 山口包装工業株式会社

- ・プロジェクトを通じてこういう業務や業界があるのだということを、垣間見ていただく大変よい機会となった。
- ・7種類の箱は、箱の制作費と商品本体価格とのバランスが難しいかもしれない。オリジナル箱では難しいかもしれないが、既成箱にラベルシール印刷等なら費用を抑えて取り組めるのではないかな。

森口ゆたか先生 / 近畿大学文芸学部教授

- ・中間発表の学生のユニークなコンセプト案を聞いて、本年度中にどこまで充実させられるかと思っていたが、学生のやる気は高く、今後の可能性につながるものとなった。
- ・学生がこのような実務的なデザインを学び、商品が世に出る過程を体験できたことはとても有り難いこと。

capacious 田中清佳

- ・障がいのある方々のことを分かろうし、原画も尊重しながらデザインに活かそうとする姿勢で課題に取り組んでくれたことが、とても嬉しく感じた。

capacious 宮本典子

- ・実際に商品化するためには、デザイン詳細（文字入れ、図柄の大きさ、箱の正面、色彩等）を詰めたり、予算をクリアする課題が、限られた授業時間の中で残った。
- ・原画を素直に魅力的に感じてもらい、ごくあたり前に存在することを目指されていたのが、新しい世代の、障がいのある方との関係性、新しい感覚と思うととても希望を感じた。



学生からの感想

Aさん

初回の授業での企業のプレゼンを聞き、1番印象に残ったことは障がい者の方々の給料の低さです。私は、私たちが1000円弱程度の時給に対して障がい者の方々は700円ぐらいいは貰えていると思っていましたが、実際は200円程度とあまりにも低い時給で驚きました。

Bさん

これまでの授業で、障がいのあるアーティストのこと、障害者就労支援におけるたくさんの課題、現時点で行われている取り組みなど、多くのことを学ぶことができました。そして、障がいのある方と直接関わることが本授業のメインではなく、わたしたちに可能な手法で間接的にケアをすることが主になると思います。その辺りも含め、とても楽しみです。

Cさん

開始当初は、米粉を使ったお菓子と障がい者アートがどのように組み合わせるのか想像が付きませんでした。しかし、見学を経て、どちらも一般的に存在する境界を飛び越えて生まれる新たな可能性を持つという共通点があるのではないかと考えました。米粉を使ったお菓子はグルテンフリーであり、小麦粉アレルギーの方へ新たな価値を与え、障がい者アートは障がい者や健常者関係なく誰もがアートというツールを用いて自己表現を行う可能性を見出していけると思います。

Dさん

パッケージデザインに障がい者の方のアートを取り入れてやることは、正直(ホスピタルアートやプロデュースを学ぶ) 私たちが関わらずとも出来ることです。しかし、ここでプロデュースの視点や今まで学んできたことを取り入れることで、ただデザインするだけでは終わらず、課題提起であったり認知にも繋がるのではないかと感じています。自分たちに出来ることを、発想豊かに見つけていきたいです。

Eさん

正直、二次利用というのがピンとこないこともあり、自分たちが二次利用することで作者さんはどう思われるのかなど不安な気持ちもあります。ですが、前回アート作品を見せて頂いた際に、本当に色々な才能があるんだと感じられてとてもワクワクしました。

Fさん

どのようなプロデュースを行えば、社会貢献に繋がるのかを考えることが難しかったです。障がい者アートというまだ世間一般に知られているとはいえずらいものを、目立たせすぎない形で知ってもらうにはどうすれば良いのかを真剣に考えました。デザインに惹かれて手に取ると、障がいのある方がデザインしたものだった、という自然な出会いがアーティスト達にとってはより嬉しいのではないかと思います。

Gさん

今回提案する商品を手に取って頂くことで、改めて活動内容や素晴らしい才能を持った障がい者のアーティストさんがいること、そして障がい者の方々への偏見が少しでも減って欲しいです。

Hさん

今回のゼミで私たちがコンセプトとしていた「日常に溶け込める」という、特別扱いせず誰もが当たり前のように日常に溶け込むことができるということは私自身も凄く良いコンセプトだと感じています。この考えが周りでも当たり前になれば良いなと感じました。

Iさん

プロジェクトに自分が参加して学んだことは福祉との関わり方の多様性です。ご協力いただいた南出製粉所さん、山口包装さんが作っているメインの製品は福祉と関わりのないものですが、今回のホスピタルアートが福祉と2つの企業を結びつけたと感じています。ホスピタルアートの形が決まっていなかったからこそ、違う分野のものを結びつける粘着剤にもなることがわかりました。この企画を通して、どんなものやサービスを扱う会社でも福祉に関われる可能性を持っていると学べました。

Jさん

私は以前からアートと福祉、社会を繋げることを行いたいと考えていたが、とても漠然としていて実際にどのように取り組めば良いのかが分からなかった。しかし、今回のプロジェクトに携わったことでお菓子やパッケージなど身近なものからアートと福祉や社会は結びつけることが出来るのだと感じた。

capacious

大阪府内の福祉施設における
現地調査の報告書

目的

現代美術の分野で活躍をする作家やアートマネージャーに、芸術活動を行っている福祉施設の実態を見てもらうことで、障がいのある方のアート作品を見る新しい視点・価値の発見を目指す。

背景

現在、障がいのある方のアート作品について、美術的に評価する際の評価基準が未発達です。評価基準を形成していく土壌を作っていく為には、多様な領域(福祉、美術、教育、環境、商工等)からの対話や理解が必要です。
まずは、この分野の認知を広げるため、学生を含めた次世代の人材や、特に美術分野の専門家に、理解・関心を高めてもらう必要性を感じています。

現地調査の概要

実施方法

事前の個別連絡とアンケート調査を通じて、府内で芸術活動を実施している福祉事業所を作家やアートマネージャーとともに訪問し、活動内容の視察を中心に行った。

訪問数

府内7事業所、府外1事業所

参加者

近畿大学文芸学部文化デザイン学科森口ゆたかゼミ 4回生
大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]学芸員
Goozen / ギャラリスト
art recipe / ギャラリスト
野原万里絵 / 画家

スケジュール

2023 年 6 月 5 日	ノーサイド(東大阪市)×アートマネジャー
6 月 8 日	アビゲイル(泉南市)×学芸員
6 月 21 日	西淡路希望の家(大阪市東淀川区)×学芸員
9 月 23 日	西淡路希望の家(大阪市東淀川区)×ギャラリスト
10 月 31 日	ライブハウス(東大阪市)×ギャラリスト
2024 年 1 月 19 日	ユウの家(堺市)×画家
2 月 8 日	やまなみ工房(滋賀県甲賀市)×学生*
2 月 16 日	YELLOW(泉佐野市)×画家

* やまなみ工房へは、学生と参考施設として訪問した



ライブハウス(東大阪市)×ギャラリスト

この後に続くレポートは、画家である野原万里絵さんが施設に訪問したものを収録する。
野原さんには予め気になる作家作品をご覧いただき、その後に各作家が所属する2つの施設に訪問いただいた。



西淡路希望の家(大阪市東淀川区)×学芸員

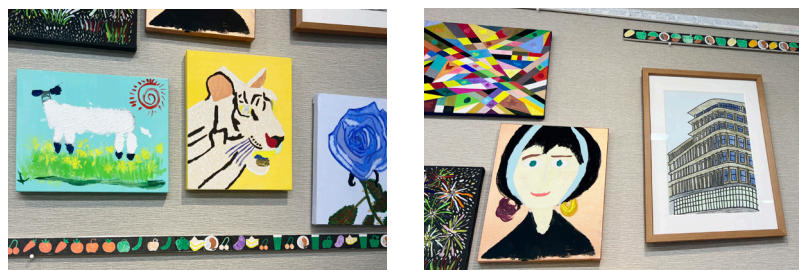


YELLOW(泉佐野市)×画家

ユウの家への訪問

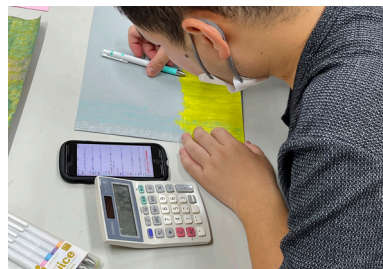
野原万里絵

社会福祉法人ユウの家は、大阪府堺市にある事業所で、パンや焼き菓子の製造販売、その他内職などの仕事をする方々が通われている。訪問した日は週1回、仕事が終わってから4名の方が趣味の創作を行なっているクラブ活動のような時間であった。アトリエは2階建ての建物の1部屋で、4人で作業するには丁度良い広さの場所だった。到着すると、既に3名の方が絵を描きながらお話しされていて、とてもアットホームな空間であった。壁にはたくさんの小作品が展示されており、絵に囲まれた空間で心地よい。



ユウの家のメンバーが描いた作品絵がアトリエ壁面に飾られている様子

以前から作品に関心のあった柴田龍平さんは、スマホを見ては電卓をカタカタと打ち、グレーの紙に黄色のアクリル絵具が塗られた紙に、PILOTのJuice upという顔料ペンで次々と数字と曜日を描いていた。電卓を打つ音が部屋の中に響く中、スマホの画面では何を見ているかと聞いてみると、その日は楽天ブックスのサイトで音楽の曲の時間を見ているとのことだった。グレーの紙の上に、水色の細いペンで描かれていたので、近寄っても私はなかなか数字を読むことは難しかったが、列になって小さな文字がどんどんと並べられていく。柴田さんは数字にこだわりがあり、年月日を伝えたと曜日が瞬時に分かるとの



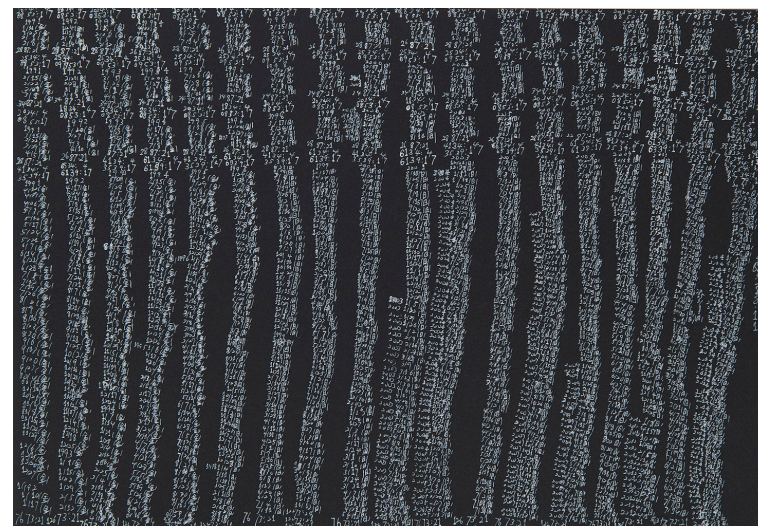
柴田龍平さんの制作風景



CDプレーヤーの置かれている本棚

ことで、私の誕生日をお伝えすると、火曜日だと教えてくれた。また、柴田さんはアトリエの中ではDJ担当のようで、本棚にあるCDプレーヤーでAKBの曲をかけてくれた。

柴田さんは、カチカチとペンを鳴らし、電卓を打って計算し、数字を描くという行為が一連となっていて、非常にリズムカルに描かれていた。音を鳴らしながら描く姿を見ていると、レシートのように列になった数字が楽譜のようにも見えてくるなど、描く姿を拝見することで絵の印象も変化していった。

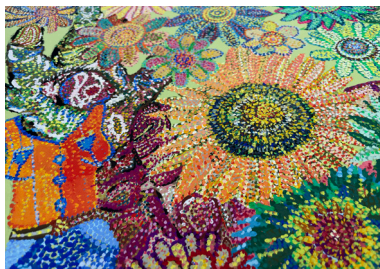


柴田龍平作品 『468曲』 色紙に顔料ペン | 27.0x39.1cm | 2023年

柴田さんの向かいに座って、大きなキャンバスに向き葵の絵を描く辻憲一さんは、アクリルガッシュと筆を使って、点描画のように向日葵の種の部分を描いていた。小さな紙の上に混色した絵の具を3種類ほど置き、種の部分を満遍なく回るように細い筆で着色されていた。「画面が大きくて大変だよ」とお話しされながらも、丁寧に着実に進んでいる姿が印象的だった。



辻憲一さんの制作風景



平安義紀作品(部分)

3人目の平安義紀さんは、花と人がぎっしりと画面に描かれ、色彩が鮮やかで密度がある。画材はアクリルガッシュを使用されていたが、アクリル絵具と盛り上げメディウムで、より重厚感のある表現をしても面白そうだ。こちらも辻さんと同じく点描画のような技法も垣間見え、根気のある作業が続いている。

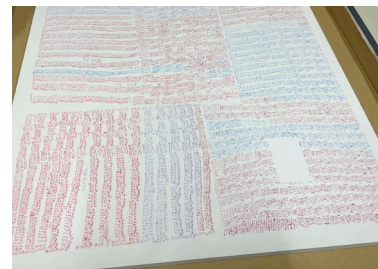
17時半を過ぎると、桂典之さんが到着された。自分の席に静かに座ると、スタッフの方が「今日は4マス描こうね」とおっしゃっていた。制作途中の作品を拝見すると、黄色の画用紙にマスがあり、その中にはカレーや野菜が描かれている。マスは定規、円はコンパスを使い、色はすべてペンで着色しているという。左端のスタートは揃っているが、右端がモチーフによってマスの大きさが異なるため、少し段差が出来るのが面白い。最初に作品だけ見た時には、人参やピーマンの中は色鉛筆で描かれているのかなと想像していたが、その部分は実はボスカを薄く塗られて出来上がっていたことがわかった。ボスカは普段、発色良くマットに塗られることが多いので、桂さんのように淡く塗る方法が思いつかず、驚いた。色の濃淡の調整がボスカでは難しいように感じるが、桂さんは新品のボスカでも同じように塗ってくると聞き、独自の描き方で大変興味深かった。



桂典之作品(制作途中)と使用画材



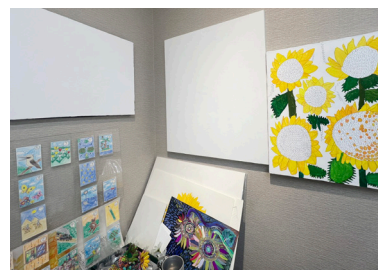
桂典之作品(部分)



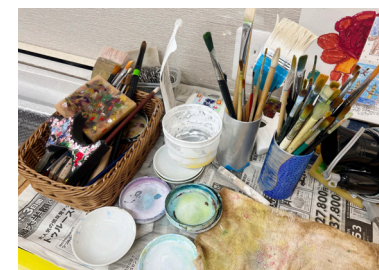
大きな木製パネルに描かれた柴田龍平作品(部分)

そして最後に、保管されている柴田さんの大きな作品も拝見した。木製パネルにジェッソとタルクを混ぜて磨かれた下地の上に、ペンで数字と曜日が描かれた作品だ。大きなパネルになると、白い抜きの部分や数字の列の流れがより効果的で、見応えがある。

パネルの下地を準備することや、どんな紙に描くかは、基本的にスタッフの方の判断になっているとのこと、普段は白画用紙やマーメイドの色紙、特別なときにはアルシュの紙をお渡ししたりすることもあるという。支持体については、スタッフの方から利用者の方々に提案すると、柔軟に自分たちで選んでくれることもあるということで、材料の種類をどこまで準備するかが、非常に難しいところではあると感じた。スタッフの立場になると、作品になりすぎず、自然な形を保って完成度を上げていくということを目指すと想像するが、支持体や画材の組み合わせ、道具の提案の仕方に、私自身だったらどうするかと、考えさせられた。



スタッフにより下準備されたパネル



アトリエにあった画材の一部

YELLOW への訪問

野原万里絵

YELLOW は、大阪府泉佐野市のりんくうタウン駅の近くにある施設で、関西国際空港へ向かう連絡橋が大きく側に見え、海が近くて空が開けた気持ちのよい場所に位置している。二階建ての建物の外壁に、YELLOW と書かれた黄色の看板がかかっており、まさにアトリエに到着したとを感じる外観である。施設の中に入ると、その日は、約11名の方が創作活動を行っており、3名のスタッフの方が出迎えてくれた。



YELLOWアトリエ内

YELLOW は、2009年にスタートされた就労継続 B 型支援事業所で、設立当初から活動されている方もおられるようだ。広いアトリエ空間で平日の午前中から夕方まで、約13名の方が創作活動をされている。ほとんどの方は平日に通って絵を描かれていて、画材もテーマもそれぞれだ。

まずはじめに、私が以前から関心を持っていた平野喜靖さんの作品を一式、鑑賞させていただいた。平野さんはその日、残念ながらお休みされていたが、作品からはご本人の声が聞こえてくるかのように、様々な言葉が所狭しと、四角い紙やパネル、段ボールやマットの上に並んでいた。画材は、油性と水性ペンがほとんどで、「平野フォント」と呼べそうな、柔らかくて均一な字体が大小様々に描かれていた。文字を読む方向はほぼ一定に描かれていて、「ジャンボサイズ」「名古屋へいくでよ」「オアシスへいくから / いかないから」など、平野さんの脳内に駆け巡っている言葉の数々が、立体的に私の頭にも浸透してくる。フォントと言葉選びが非常に特徴的だが、作品を手にとってみると、紙やパネルの裏表全てに言葉がぎっしりと描かれていることにも驚いた。両面が鑑賞可能な展示方法で観たいと思わせる作品である。裏と表の関係でいうと、平野さんは最近、白紙のものに描くだけでなく、アトリエにある雑誌を開いては、その上に言葉を描く方法も自身で始められたようだ。その発展の仕方が非常に面白く、例えば雑誌の中にペンギンが泳いでいる写真が掲載されているページには、「けがしてるのよ / けがしてないのよ」「うかんでるしさ / うかんでないしさ」という対になる言葉が、背景の写真に呼応するかのように描かれている。他のページをめくると、炭火で肉を焼くおじさんの写真の上に、茶色のペンで「ぬれてるので / ぬれてないので / ぬれちゃったので」といったように、写真と関係するような、しないような言葉も描かれていた。平野さんは、普段は多くをお話しされない方のようなのだが、描かれた言葉の関係性がユニークで、消えてはまた現れる複雑な思考の断片を見せていただいた。



平野喜靖作品 「無題」 紙に顔料ペン | 39.2x54.3cm | 2015年



平野喜靖さんの最近の作品



平野喜靖さんの雑誌に文字を描く作品（一部）

次に、同じく作品に関心があった有田京子さんとお話した。有田さんはその日、アクリル絵具でピンクに着色されたキャンバスに、ボス力（ボス力）で点を描いている最中だった。見られながら描くことに慣れておられるようで、スタッフの方々と和気藹々と会話をしながらも、色彩の規則性を守るようにボス力を持ち替え、安定した姿勢で点を打つ姿には貫禄があった。有田さんの作品はどれも非常に完成度が高く、アクリル絵具とボス力のみで描かれたとは思えない、織物を持つような重厚な魅力を兼ね備えている。描く際に集中力が必要とされる絵ではあるが堅苦しくはなく、リスやタコ、人などの動物のデフォルメの仕方が愛らしい。

柔軟な造形力に満ち溢れている作品は、有田さんのお人柄がよく表れていた。今日の作品に至るまでの過去作を拝見すると、2011年頃に制作された、着せ替え人形キットのような作品があった。滑りの良い紙にボスカで着色され、多作の有田さんらしく、この頃からかなりの数がある。約13年前の作品は、現在の作品の印象とは異なるが、点やストライプが描かれていたり、当時からボスカに馴染みがあったようだ。このように施設の中で、過去の作品も美しい状態で保管されていることで、作品の変遷を知ることができ、長年に渡って同じ場所でスタッフの方々と関わりながら活動することの良さが垣間見えた。



有田京子さんの制作風景



有田京子さんの過去に制作された作品



有田京子作品 『タコと私』

その他にも、多くの方々が制作されており、百人一首のかかるたをボスカで模写するように描かれていたYOUさんや、直線で構成されたゲームの世界に迷い込んだような絵を描く、りくとさん。PILOTのJuice upというシリーズの顔料ペンで、色紙に繊細な線を描く南部たきさんや、色鉛筆を三層に重ねて抽象画を描く西村賢示さんの作品も見応えがあった。

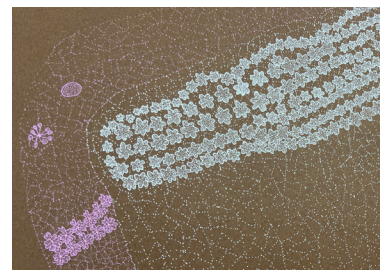
西村さんも非常に多作で長年の作品が保管されており、色鉛筆に至るまでの画材の変化と試行錯誤に、画家として共感する点が多かった。



YOU作品（百人一首の一部）



りくと作品（部分）



南部たき作品（制作途中）



西村賢示さんの制作風景（手元）

今回施設を訪れて意外だったことは、作品のバリエーションが豊かで非常に完成度が高く、紙やキャンバスなどの支持体と、絵の具や色鉛筆、ペンなどの画材のミスマッチさを感じられなかったことだ。それは、どの方々にも共通する点として、ほぼ毎日同じ画材に触っておられるからこそ発見できる、小さな変化に対する工夫が作品の隅々から感じられた。同じ時間帯、画材、テーマで描き続けることは、誰にとってもできることではないが、YELLOWに通われる方々が、規則的な生活の中で描く絵の安定感と確かな進歩には、非常に羨ましい気持ちも生まれた。毎日の活動の中での、互いの関係性についてスタッフの方に何うと、影響され合うことはあまりなく、あくまでも自分の持つ世界の中で絵は進んでいると話されていた。時々会話の中で、誰かの作品が賞を取ったり、行き先が決まったりする事などは、制作の刺激や意欲にも繋がっているようだ。

そして、創作活動は夕方まで続けられ、片付けの時間を迎えると、各々が手際良くパレットを洗ったり、道具を戻されていた。その姿は、創作することが毎日の出来事の一つで、何一つ特別なことではないことを改めて思い出させてくれた。

終わりに

今年度は、例年のカペシヤス事業に加えて、令和 5 年度文化庁「障害者等による文化芸術活動推進事業」の補助を受け「他領域連携による障がい者アートの人材育成」を目指し、①大学および企業との連携や②作家やアートマネージャーと一緒に施設訪問に新たに取り組みました。実施に際して、特に近畿大学文芸学部森口ゆたか先生とゼミ生の皆様、山口包装工業株式会社の山口様、有限会社南出製粉所の南出様、画家の野原万里絵様、そして日常業務でお忙しいにも関わらず、温かい受け入れ体制と対応時間を調整してくださった福祉施設の関係者の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

近年、社会一般的にも人手・人材不足の問題が言われていますが、それは福祉業界やアート業界においても同様です。IT や AI 技術によって人材不足を補う動きもありますが、福祉とアートの分野は、個々のニーズへのきめ細やかな対応やプロモーションの個別戦略が求められ、また AI が得意とする経験則や論理的思考の延長線では解決し難い特性があることから、本分野を担う生身の人材を計画的で増やしていくことが、多様な人々がより豊かに生活していく社会には必要不可欠です。

福祉とアートの橋渡し役にはどのような能力が求められるのでしょうか？双方の興味や知識はもちろんですが、効率化ばかりを追わず、現場で起きていることを受け入れ、日常の中の些細なことに気づき、それが既存概念・価値を転換させる大発見だ！と思い込むような大胆さも求められるかもしれません。すべて 1 人が担わなくても、このうちのどれかが得意であればそれを起点に深めることができ、やりがいのある分野であることは違いありません。

一方、このようなことが実践できる人材は稀です。私たち自身でさえ、まだまだトライ & エラーを繰り返しながら学んでいる最中です。この分野に従事する人材をすぐに育成することなどできないことを承知で、本年度は、まずはプロジェクトに参加し、このような世界・分野があるのだということを知ってもらう入り口に立つことを目標に、主に大学生、作家や学芸員、アートマネージャーの皆様を巻き込みながら行い

ました。結果として、私たち自身も大きな学びのある、また相談できる関係性を築くことができた有意義な機会となりました。

近畿大学文芸学部文化デザイン学科の 3 回生との「障がいのある方のアート作品の二次利用展開のケーススタディ」では、若い世代の方に福祉作業所の現場を垣間見てもうることができました。魅力的なイラスト・デザインを創造するクリエイティブな能力を認め合いながら、声高に社会貢献、障がい者支援を謳わない、社会の中に自然に存在するデザイン展開を目指されたことが印象的で、多様性を認め合う社会が近づきつつある予感がしました。

学芸員や作家による「福祉施設における現地調査」では、参加した皆様が、驚きや新しい気づきを得ながら行うことができました。日頃私たちは、『多くの美術関係者は、日々自分の専門分野に関する研究や自身の制作に注力されており、敢えて「障がい者アート」を取り上げることはない、食わず嫌い(嫌いでもない)のような状況だ』と感じていました。今回の参加者皆様については予想通りで、専門家は、これまで機会がなかっただけで、施設訪問を通じて、制作現場で行われていること、生まれている作品を分析することには長けていると感じるものでした。加えて、制作現場を見てもらえることは、障がいのある作者自身も、外部との交流機会が増え、制作のモチベーションが高まるなど、良い影響を与えるようです。

今回「他領域連携による障がい者アートの人材育成」に、実践プロジェクトを軸に着手できましたこと、課題もまだ多く残っている状況ではありますが、大きな一歩と感じています。ただ、このような事業は繰り返し行うこと、参加者数を増やしていくこと、継続することが重要で、真の人材育成が芽生え始めるものです。長期スパンでの体制づくり、環境づくりが進むことを、福祉とアートの両分野に従事する者として切に願っています。

宮本典子 / capacious 事務局

障がいのある方のアート作品の二次利用展開のケーススタディの報告書
大阪府内の福祉施設における現地調査の報告書

主催：大阪府

編集者：宮本典子、田中清佳

デザイン：有賀沙織

写真：仲川あい (P.7)

2024年3月発行

capacious 事務局

540-0012 大阪府大阪市中央区谷町5丁目6-7 中川ビル3B

office N内 / E-mail: info@capacious.jp / Web: capacious.jp



令和5年度 文化庁 障害者等による文化芸術活動推進事業

